

---

# 最高の贈りもの

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最高の贈りもの

### 【Nコード】

N0831BA

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

ペドロとテレサは観光でスペインからシベリアに来ていた。そのあまりにも寒いシベリアでペドロがテレサに贈ったものは。作中の贈りものはシベリアでは実際に最高の贈りものだったそうです。

## 第一章

### 最高の贈

りもの

寒い。そこはひたすら寒かった。

今ペドロ・クリスとテレサ・シエラモレナはシベリアにいる。何故そこにいるかというところ。

「ここにいるのね？」

「ああ、いるらしいんだ」

ラテン系そのものの顔立ちに黒い巻き毛と瞳の若い男がこれまたラテン系そのものの濃い顔立ちに波うつ黒髪の小柄な女に言う。二人共実に寒そうだ。

「マンモスがさ」

「それとスペインがあまりにも暑いから」

「避暑も兼ねてな」

それでだ。シベリアに来たと言うのだ。コートと帽子で完全装備の二人の周りには雪しかない。そして遠くに雪で白くなったタイガが見える。

そうした殺風景な中でだ。ペドロはテレサに言うのだった。

「来たんだけれどな」

「確かにスペインは暑いわよ」

テレサもそれは認める。今年のスペインはとりわけ暑かった。

だがそれでもだとだ。彼女はペドロに言うのだ。

「けれどね。幾ら何でも」

「シベリアはか？」

「寒過ぎるでしょ。しかもね」

「何も無いな」

「遊ぶ場所とかないの？」

その白い大平原の中でペドロに問う。

「スキーしたりとか」  
「雪合戦はできるか？」  
「子供じゃないんだから」  
「あとは」  
「何があるのよ、ここに」  
「ウオツカか」  
「言わずと知れたロシアの酒だ。アルコール度がかなり強い。」  
「それがあるけれどな」  
「ワインは？」  
「何でもアルコールが弱くて飲めたものじゃないらしいな」  
「身体を温められないのだ。何故ロシアはウオツカなのか、それはあまりにも寒く身体を温めなくてはならないからだ。だからなのだ。特にここじゃな」  
「シベリアではなのね」  
「ああ、ウオツカを飲んでサウナを楽しむ」  
「凄く心臓に悪そうね」  
「それがロシア人の遊び方なんだってよ」  
「お酒とサウナだけって」  
「それを聞いてだ。テレサは。」  
「呆れ果てた声でだ。ペドロに言うのであった。」  
「全く。遊ぶところはないししかも周りはこちら」  
「マンモス探そうな」  
「考えてみたら。スペインが幾つも入る様な場所で探すのよね」  
「そこに見えてる森の中とかでな」  
「確か狼とか虎もいるのよね」  
「虎は東の方だからここにはいないみたいだな」  
「シベリアにはだ。いないというのだ。ロシアで虎がいると言われているのはアムール河周辺だ。それは大体豹も同じである。」  
「狼はいるな」  
「狼に襲われたら洒落にならないじゃない」

「まあ絶滅しそうだっていうけれどな」  
シベリアオオカミである。実際に絶滅危惧種に指定されている。  
「滅多に会えないだろ」  
「マンモスとどっちが会う可能性高いの？」  
「狼じゃないのか？マンモスはひよっとしたらだしな」  
「全く。シベリアって本当に何も無いのね」  
「だから雪と森とサウナとウォッカと」  
「それが何もないっていうのよ」  
スペイン人のテレサから見て。シベリアはそうした場所だった。  
尚このことはロシア人から見てもあまり違いはなかったりする。  
「道理で流刑地になつた筈だわ」  
「ああ、ここに流刑になつたらな」  
「死んだも同然だったわね、確か」  
「寒い中で重労働させられるからな」  
ロマノフ朝の頃は送ってそれで終わりだった。ただし退屈と寒さ  
はある。しかしソ連時代は退屈ではなく寒さがあった。それだったのだ。

## 第二章

「ばたばた死んだらしいしな」

「まさに究極の流刑地ね」

「けれど涼しいだろ」

「ここは涼しいんじゃないやなくて寒いつていうのよ」

あまりにもだ。寒いというのだ。

「で、お迎えが来るまで暫くはここに居るのね」

「ああ、マンモスを探してウオツカとサウナを楽しんでな」

「全く。涼しい場所に珍獣を探す旅行をしようつていつからついで来たけれど」

それでここに来たのだ。シベリアに。

「とんでもないことになったわね」

「失敗だったか？」

「最高の失敗ね」

「そりゃまた」

こんな話をしてだ。二人はシベリアに居るのだった。

シベリアは確かに何も無い。本当に何もなかった。

ツンドラとタイガは雪ばかりで殺風景なことこのうえない。おまけに何処に行ってもお目当てということになっているマンモスもいない。

それで二人は夜になるとだ。

サウナであつたまつた後にウオツカを飲みながらだ。話をするようになっていた。

話はいつてもテレサの愚痴だった。とにかくこう言うのだった。

「もう二度とね」

「シベリアには来ないか」

「そうよ、絶対に来ないわよ」

こうペドロに言うのだ。自分達の部屋の中で飲みながらだ。心な

しかその部屋も収容所の一室めいている設備は暖房もあればベッドもあるがそれでもだ。そんな感じに思えるのだ。

その部屋の中でだ。テレサはさらに言う。

「本当に流刑地じゃない」

「俺もまさかここまでとは」

「思わなかったってどういうの？」

「ああ、思わなかったよ」

実際にそうだったというのだ。

「ここまでなんてな」

「けれどシベリアよ」

テレサは顔を曇めさせてペドロに返す。

「有名じゃない」

「話には聞いてたさ」

「けれど。目ではなのね」

「日本の諺だな」

今度はこう言うペドロだった。それからの言葉だった。

「百聞は一見にしかずだな」

「百聞はね」

「ああ、一見だよ」

まさにそうだというのだ。

「本当にな」

「全く。付き合う方はね」

「災難か？」

「普通カッパルの旅行にこんなところはないでしょ」

「安かったしな」

「誰も来ないからでしょ」

異様に格安のツアーだったのだ。しかし参加したのはこの二人だけだった。もつと言えばガイドの人もいない、そんなツアーに参加してのことだったのだ。

「だからよ」

「そういうことか」

「そうよ。それにしても」

テレサは飲みながらだ。困った顔になってこんなことを言った。

「寒いわね」

「ああ、寒いよな」

「滅茶苦茶寒いわ」

「流石に部屋の中は違うけれどな」

「けれど。あまりにも寒いわ」

「こつ言つのである。」

「特に足が」

「足がなあ」

「冷え性じゃないのに何か」

南国スペイン人にとってはだ。余計にであった。



### 第三章

「足が冷えるから」

「俺は手だな」

「手袋してる？」

「一応してるけれどな」

それでもだ。寒いというのだ。

「二枚重ねでいくか」

「私はどうしようかしら」

「ブーツ履いてるよな」

「それでも寒いよ」

「これだけ寒いとか」

「ええ、とてもね」

こんな話をするのだった。とにかく二人は寒さに参っていた。

それでだ。ペドロは。

ホテルにある売店でだ。あるものを買った。それは。

手袋だった。手が寒いからだ。それで買ったのである。。そしてその時にだ。

ロシア名物と言ってもいいお婆さん、よく太っていてそこにさらに厚着をしている恰幅のいいお婆さんがだ。カウンターから彼に言うてきたのだ。

「お兄さん連れの人いるわよね」

「ああ、彼女なんだ」

それだとだ。彼はお婆さんに笑顔で話した。

「どうだい？美人だろ」

「そうだね。こっちはいない感じのね」

「スペインのな。そっちな」

「スペインね。何処の国だったかな」

「南の方の国だよ」

ロシアから見ればだ。そうなるからこう答えた彼だった。

「この国から見てな」

「南ね」

「ああ、かなり南だよ」

「じゃああつたかい国なんだね」

お婆さんは南と聞いてだ。羨ましそうに彼に問うた。

「そうなんだね」

「ああ、太陽が眩しくてな」

「いいねえ。あたしもそんな国に住みたいよ」

「寒いからだね」

「そうだよ。ロシア、特にここは寒くてね」

寒いからこそその言葉だった。

「もうね。あつたかい国とかはね」

「羨ましいかい」

「それだけはね」

本当にそうだという口調だった。

「そう思うよ」

「確かに。これだけ寒いとな」

「そうだろ。けれどあんたどうして」

「ここに来たつていうのかい？」

「木でも数えに来たのかい？」

お婆さんはここでジョークを言ってきた。

「今さら流刑でもないだろうに」

「いや、ロシアは今でも流刑あるんじゃないのか？」

「とりあえずここには来てないね」

「そうなのか」

「そうだよ。大丈夫だよ」

こう話してだ。そのうえでだった。

お婆さんはだ。あらためてこう言つたのだった。

「寒いからね。ここは」

「何につけてもそれだよな」

「そう。だから手袋もね」

「スペインのじゃ駄目だったな」

「手袋だけじゃないよ」

お婆さんはここでこうも言ってきた。

「他のもだよ」

「他のも？」

「そう、相手の人は何処が寒いって言ってるんだい？」

「足が寒いって言ってるな」

テレサが言ってきたことをそのままお婆さんに話す。

「あそこがね」

「足がなんだね」

「ああ、足がな」

そうだといいのだ。

「足が寒いって言ってるよ」

「ああ、じゃあいいのがあるよ」

「いいのが？」

「彼女へのプレゼントに最高のがあるよ」

お婆さんは笑ってペドロに話した。

## 第四章

「それはどうだい？」

「じゃあそれを買うか」

「乗ったね。お兄さんもわかってるね」

「というかここに連れて来たのは俺だからな」  
「だからだというのだ。」

「せめてそれ位はししないとな」

「愛想尽かされるね」

「ははは、そうなんだよ」

ペドロはお婆さんの今の言葉に顔を崩して笑った。

そしてだ。こうも言うのだった。

「そうなるからな。せめてな」

「贈りものはししないとね」

「スペイン女は厳しいからな」

こんなことも言う彼だった。

「男が少しでも駄目だと見るとな」

「ふつてくるんだね」

「そうだよ。まあいい男と見たら情熱的だけれどな」

「極端なんだね」

「カルメンなんだよ」

そのスペインを舞台にしたメリメの小説、ビゼーのオペラのヒロインだ。とかく情熱的で独自の恋愛論を持っている女性像で知られている。

「スペイン女つてのはな」

「あら、じゃあ付き合うのは大変だね」

「そうだよ。滅茶苦茶な」

「じゃあ余計にだね」

「ああ、ここは贈りものだよ」

とにかくそれをしなければだというのだ。

「それで何かあるかい？」

「そうだね。寒いからね」

「手袋にしようか。俺もそうだし」

「待った。その人はあれだったね」

お婆さんはペドロの話聞いてだ。それで言っただった。

「足が寒いって言ってるんだね」

「ああ、そうだよ」

「それならいいのがあるよ」

にこりと笑ってだ。ペドロに言った。

「最高の贈りものがね」

「最高の？」

「ああ、こないだ贈りものはないさ」

笑顔でだ。彼に話すのである。

「それにしたらどうだい？」

「へえ、最高のねえ」

話を聞いてだ。ペドロもだ。

乗り気の顔になってそれでお婆さんに尋ねた。

「何なんだい？それで」

「これだよ」

「これがかい？」

「ああ、これがここでの最高の贈りものなんだよ」

笑顔でだ。彼に出すのであった。その贈りものにすべきものを。

彼は躊躇なくそれを買ってだ。それからだった。

部屋に戻ってだ。サウナからあがったばかりのテレサに声をかけた。

「よお、今何してるんだい？」

「何も」

していないとだ。テレサは応えた。部屋の中でも厚いズボンにセーターだ。暖房をつけていてもそれでもシベリアの寒さを考えての

格好だった。

その格好でベッドのところ座ってだ。彼の言葉に応えたのである。

「今からウオツカ飲もうって思ってたけれどね」

「へえ、そうだったのか」

「ええ、そうよ」

その通りだというのだ。

「あんたが帰ってきたらね」

「一緒に飲もうって思ってたんだな」

「そうだったのよ。じゃあ飲む？」

「ああ。けれどな」

「けれど？」

「その前にな」

こう言っただであった。

「一ついいか？」

「いって何がよ」

「だから。プレゼントだよ」

笑顔になってだ。彼女に言ったのである。

## 第五章

「俺からのな。最高のな」

「最高のプレゼントって」

「ほら、これだよ」

こう言っ出て出してきたもの。それは。

靴下だった。厚い靴下だ。それを彼女に出してきたのだ。

それでだ。こう彼女に言うのである。

「じゃあこれをな」

「これを穿いてくれてっていうのね」

「ああ、そうしてくれるか？」

「気が利いてるわね」

テレサはその靴下を見てだ。笑顔になっ言うのだった。

「もうずっと足が寒くてね」

「そんなこと言ってたよな」

「それでその靴下なのね」

「そうだよ。それでどうするんだい？」

「断る理由はないわ」

微笑んでだ。テレサはペドロに応えた。

「それじゃあ」

「そうか。穿いてくれるんだな」

「早速ね。スペインの靴下じゃとてももたなくて」

あまりにも寒いからだ。そのせいだ。

「有り難う。それじゃあね」

「じゃあな」

こうしてだ。テレサは彼のその贈りものを受け取りだ。そうして  
だった。

実際に早速穿く。すると。

それだけでだ。彼女の顔が変わったのだった。

「いいわね」

「温かいかい？」

「こんな温かいのないか」

「ええ、ないわ」

「そこまで温かいというのだ。」

「これだけ温かいと」

「これから楽だろ」

「実際にね。ただね」

「ただ？」

「あんた意外と気が利くのね」

「こうだ。彼に言うのだった。」

「案外ね。何年も付き合ってたけれどはじめてわかったわ」

「はじめてかよ」

「だって。恋人をこんなところに連れて来るのよ」

「このシベリアにだというのだ。」

「それじゃあね」

「人間誰だって間違いはあるだろ」

「あんたの場合いつもじゃない」

「それは気のせいだよ」

「どうだか。とにかくね」

「ああ、とにかくかよ」

「有り難う」

「笑顔でだ。ペドロに話した。」

「じゃあ早速ね」

「穿くんだな」

「そうさせてもらうわ。だって寒いから」

「それに尽きるよな」

「「この寒さは異常よ」

テレサは苦笑いと共に述べる。もうその靴下を穿こうとしている。そうしながら。彼女は恋人に話すのだから。



「だからね」  
「早速穿くんだな」  
「そうよ。それにね」  
「それに？」  
「あらためて言うわ」  
「こうだ。また笑顔でだった。」  
「有り難うね」  
「一回じゃないんだな」  
「普通は一回だけれど」  
「今回は違うというのだ。今回だけは。」  
「特別よ。だつてこれだけいいって思った贈り物ないから」  
「だからなんだ」  
「ええ。こうして穿くと」  
「実際に穿くとだ。どうかというよ。」  
「最高の温かさよ」  
「最高か」  
「そうよ。こんなに温かいものないか」  
「そうか。それはよかつたな」  
「確かにここは最悪の寒さだけれど」  
「シベリアの寒さはだ。どうしても否定できなかつた。尚この話ではないがロシアに攻め込んだ者は大抵その寒さの前に敗れてしまっている。」

## 第六章

その寒さはシベリアではより顕著だ。そのシベリアの寒さは最悪だとしてだ。テレサはペドロに対してだ。こんなことを話したのだ。つた。

「この靴下はね」

「気に入ってくれたんだな」

「そうよ。最高の温かさよ」

そしてだ。それは。

「最高の贈りものよ」

「そう言ってくれるんだな」

「ええ。けれどよくわかったわね」

微笑みからだ。少しいぶかしむ顔になっての問いだった。

「貴方が。こんなこと」

「こんなことって？」

「貴方みたいに気の利かない人が」

「俺って気が利かないか？」

「普通彼女をシベリアに連れて来る？」

言うのはここからだ。最早センス以前の問題だった。

「そういうことよ」

「何だよ、そのシベリアだからな」

「この贈りものができたっていうのね」

「そうだよ。お婆ちゃんに教えてもらったんだよ」

そしてついついだ。自分で言ってしまうのだった。

「売店のお婆ちゃんにな」

「贈りものなら？」

「靴下がいいってな」

そのままテレサに話してしまうのだった。

「お婆ちゃんが教えてくれたんだよ。シベリアじゃ最高の贈りもの

だつてな」

「成程、そうなの」

その話を聞いてだ。テレサも納得した。

そのうえで頷いてだ。こうペドロに言った。

「これでわかったわ」

「わかったつて？」

「ペドロがこんな気の利いた贈りものする筈ないから」

言うのはこのことだった。ペドロのことだ。

「どうしてかって思ったけれどね」

「これでわかったつて？」

「お婆さんに教えてもらったのね」

「ああ、そうだよ」

「そういうことなのね」

「だからそれがどうしたんだよ」

「気が利かない人が利くことをする時つて」

その時はだ。どうかというのだ。

## 第七章

「そうした裏事情があるのね」

「うっ、しまった」

「言ってからわかったの」

「言っちゃまったよ。どうしようか」

「どうもしないわよ。ただね」

「ただ？」

「気持ちは変わらないから」

それはだ。変わらないというのだ。

「御礼の気持ちはね」

「何だ、そうなのか」

「ええ。できればこれが」

こうしただ。気の利いたことがだ。

「これからも続けばいいけれどね」

「何だよ、続かないっていうのかよ」

「ペドロだから」

そのだ。彼だからだというのだ。

「スペイン一気の利かない男だから」

「じゃあその気の利かない奴とずっと一緒にいるのはどうしてなんだよ」

「どうしてかって？」

「そうだよ。どうしてなんだよ」

こうだ。テレサに少しムキになって問い返すのである。

「それはどうしてなんだよ」

「ああ、それね」

「それだよ。それはどうしてなんだよ」

「決まってるじゃない」

一呼吸置いてからだ。テレサは彼に答えた。

「もうそれはね」  
「決まってる？」  
「好きだからよ」  
「だからだというのだ。」  
「それでよ」  
「それでか」  
「確かに気が利かないわ」  
「それはどうしてもだ。否定できないことであった。」  
「けれどそれでもね」  
「他にもいいところあるってか」  
「この靴下よ」  
「彼がくれたその。温かい靴下だというのだ。」  
「こついうことよ」  
「靴下か」  
「確かにお婆さんに教えてもらったけれど贈りものをくれたのはペドロだから」  
「それでだと。テレサは話す。」  
「そついうことだから」  
「まあ。よくわからないけれどな」  
「言葉ではよね」  
「頭の中では大体わかるけれどな」  
「じゃあそれでいいから」  
「そんなペドロのことを受け入れての言葉だった。」  
「それでね」  
「そつ言ってくれるんだな」  
「そつよ。だから」  
「それでだと。また言ったテレサだった。」  
「そのうえでだ。彼女から彼に言った。」  
「それでね」  
「ああ。それで？」

「今日とはことんまで飲みましょう」

「こう彼に言ったのである。

「二人でね」

「もうお互い酔い潰れるまでか」

「そうよ。気分がいいから」

「わかったよ。それならな」

「ウオツカならどれだけでもあるし」

「少し飲んだだけでも効くのになんか幾らでも」

「ええ。だから一緒にね」

「飲むか。乗ったぜ」

ペドロも笑顔で応え。そうしてであった。

二人でだ。そのウオツカで乾杯して。それからその日は本当に酔い潰れるまで飲んだ二人だった。ささやかだが温かい贈りものに着けながら。

最高の贈りもの

完

2011・7・4

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0831ba/>

---

最高の贈りもの

2012年1月1日23時54分発行